

第4回丹後地域における府立高校の在り方懇話会（概要）

- 1 日 時 平成28年10月18日（火）午前9時30分～11時50分
- 2 場 所 アグリセンター大宮 多目的ホール
- 3 出席者 24名
府教育委員会 川村指導部長、山本課長、中島担当課長、
山本丹後教育局長、堀田丹後教育局次長 ほか
- 4 概 要
 - (1) あいさつ
 - (2) 出席者紹介
 - (3) 資料説明
 - (4) 意見交換（主な意見）

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

- 保護者のアンケート結果がP3に載っているが、問「現在の高校の在り方を変えていくこと」について、必要と回答いただいている人が約75%いるということは、実際にお子様が高校に入学することをイメージしたことからこういう回答になっているのではないかと思う。高等学校の教育を受け持つ者として、丹後の子どもたちの可能性をよりしっかりと保障できる条件を整備することが、私たち大人の役目かとも思っている。そういう点では、少しでも条件の良い環境を整える必要があると思う。例えば、小さい子が水泳を覚えるのに、はじめは浅い場所で練習し、だんだん大きくなるにつれてより深いプール、あるいは海での学びをするように思う。そのように、段階的に環境を変えて子どもたちを育てることが重要であると思うし、そうした環境整備が求められていることが、ここから読み取れるのではないかと思う。ただし、条件として交通が不便だという地域事情があるわけで、それを大人の力で克服できるよう知恵を出すことも、我々に必要なことかと思う。高等学校だけで教育をしているわけではなく、地域の方々の協力や応援、あるいは地域との関わりは非常に大切にしなければならないし、生徒に地域への視点ということも教えていく必要もあると思う。地域の皆さん、ご家庭の協力を得て、高校の教育があるのだと思う。そういう視点で在り方の検討を深めていく必要があると考えている。
- 今後、生徒数が減少し、このままいくと各校とも小規模校になってしまう。その中で、いかにして教育の質を維持するかということ考えた時、当然統廃合によって学校の規模を確保することが一つの考え方として出てくると思う。ただし、きめ細かな教育であるとか、小規模校の良さ、メリットもあるし、また、各学校の伝統や地域の発展に貢献してきた欠かすことのできない教育機関としての役割を考えると、小規模であっても残してほしいという思いは当然考えられるところである。そこを折衷的と言うか、大規模の良さをなんとか持ちながら、小規模になることのデメリットをクリアしようということで、「学舎制」が考えられていると思う。現段階においては、「学舎制」がベストとは言わないが、ベターな方向性ではないかと思う。
- 資料2の説明で、10年後には現在の生徒数が約半分近くになると書いてあるが、10、20年後を見据えて丹後の子どもたちにとって平等に、丹後の学校に通学可能な場所に学校があることが良いと思うし、将来を見据えれば、京都丹後鉄道の沿線に

立地して、駅から自転車やバスで通学できるようにできないか。定時制の弥栄分校のことも示されているが、ここも少し遠いのではないかと思う。学校の移動ができるのかどうかはわからないが、持続可能とするために鉄道沿線に集中する方向でなんとか高校を立地できないかと思う。

- 公聴会に2回ほど出席させていただき、保護者の方の意見等も聞かせていただいた。資料のP3にあるように、内容がよくわからない中での（保護者への）アンケート実施ということで、どうしたらよいか、保護者も考えることができない中での提出という形になったのではないかと思う。参加者がすごく少なかったことも少し残念だと思った。

子どもが少なくなっていく中で、これからを考えていくことは必要なことだと思う。府は統廃合ではなく「学舎制」ということで地元に残していきたいという考え方で進められているようだが、その中でわからないところがある。P25に、多様な学習をするためには一定規模の学校がないといけない、とあるが、日常の授業ではA学舎、B学舎の間を生徒は移動しないということなので、それならあえて「学舎制」にしなければいけないのかが少しわからない。小規模校で残しても、そう変わらないのではないかと思った。また、子どもたちにとっても、学舎間の移動はかなり負担になるのではないかという思いがある。

- 資料に示されている様々な意見の中で、交通の問題が多く出されているように思う。現在、各高校にはマイクロバスがないので、部活動であるとか課外活動等にもずいぶんと不便をきたしていると思う。以前にいただいた資料だが、丹後地域の府立高校における平成27年度入学者選抜の状況を見ると、各市町から外部の高校に通学をされている生徒が増えてきているように思う。要するに広域で子どもたちが移動している中で、現状は、「学舎制」の先取りのような感じか、と思っている。

そこで高校の校長に尋ねるが、例えば、宮津高校であれば京丹後市の久美浜以外からも通学されているし、峰山高校にも各町や橋立中学校等からも通学されている。また、福知山の私学にも当然行っておられるが、保護者を含め、そういう子どもたちの授業や部活動への影響ということが、現実としてあるのかどうかお聞かせいただけたらと思う。

- 宮津高校は非常に広域から生徒が集まってきている。早い時間に家を出るご家庭もあるし、保護者が駅まで、あるいは学校の近くまで送迎をするというケースも見受けられる。

学校生活上それがデメリットになっているかという点については、うまくプラスに変えるようにと学校で指導している。例えば、通学時、列車の中での過ごし方をどうすれば自分にプラスになるかを投げかけ、自分なりに活かせるように時間の使い方を工夫させている。それも一つの指導だと思うし、実際に生徒たちはその時間をうまく利用して自分の成長に繋げているかと思う。

部活動については、本校は7限授業が終わった後、午後7時までの部活動としてしている。そのため、時間的には短時間の活動になっており、これが日常である。ただ、短時間の中でいかに集中力を高めてモチベーションを持続させていくかは、一つの力と捉えることができるし、そうした形で指導しながらやってきている。実際、部活動をしている生徒たちは、集中力が高まっているのではないかと感じている。なお、土、日曜日、祝日等の部活動については、他校とそう変わらないと考えている。

- ◇ 私学についても広域から通学されている生徒はいらっしゃると思うが、学校教育との関係でどのような状況かを教えていただければと思うがいかがか。

- 本校（京都暁星高校）の場合、大型・小型のスクールバスが各2台あり、1ルートは大江山のふもとの与謝から、そして間人から竹野川沿いを通るルートでスクールバスを利用している生徒が70%を超えている状況である。朝は、間人からスタートする時間が7時前になり、非常に早い。帰りは、部活動を活発にさせてやりたいが、女子生徒もいるし、宇川の方面まで帰る生徒もいる中で、18時には学校を出なければならず、本校では、部活動については諦めと言うと語弊があるが、その分、体験という形に回すことにしている。

一つ質問したい。以前にも述べたとおり、「学舎制」においてどの学舎にも普通科があるという形態について、普通、大学であれば、〇〇キャンパスはこの学科、というように、全く種類の違うものがある中での選択である。「学舎制」を導入した場合の入学者選抜方法の例が資料にあるが、今の選抜制度と変わらないため、学舎によっては、50、60人ぐらいの規模の学年がこれから存在するわけで、その場合、本当に今とどう違うのか。教員が移動するだとか、部活動を合同だと説明をされているが、今一つ現実味がないというか、A学舎に入った生徒はそのまま3年間A学舎で、B学舎もB学舎で、とのことなので、そのあたりが正直わかりにくい。

- ◆ 「学舎制」についてご質問があったので説明させていただく。これまで懇談会や公聴会でも説明をさせていただいたが、高校に一定規模がある場合は、子どもたちの進路選択によりコースに分けることが可能になる。そうでなくても、本府の場合は、いわゆる習熟度で英語や数学などは講座を分けて展開をしているところである。このように分けるには子どもが一定数いないとできなくなる。子どもたちの様々な進路希望、例えば、難関の国公立大学を目指している、私立大学を目指している、就職を目指している、専門学校を目指している生徒等がいるが、学力も様々である中で、今までは対応していたわけであるが、子どもの数が減ると非常に対応がしにくい部分が生じる。子どもの数が減ると教員も減る。教員が減るとことは子どもたちの希望にあった講座が非常に設定しにくいことになる。生徒も教員も減っていくとなれば、1つの講座で授業をしなくてはならないという形が見えてくる。

小・中学校の場合は、少人数授業はしておられるが、講座の選択ということは非常に少ない。しかし、高等学校の場合は、進路に応じて選択が非常に増えてくるため、その点でも子ども、教員が減れば非常に困難な部分が出てくることになる。「学舎制」によって、それがどう緩和されるかであるが、それぞれの学舎は活かしながら、一つの高校となるわけであるから、要は単独で小規模校になるよりも2つの学舎を一つにした方が、子どもも教員も人数が確保できるということである。そして、一つの高校ということは、例えば、A学舎にいる教員をB学舎に移動させることもできるし、あるいは、年度が変われば担当を代えて対応することも校長の判断で可能というフレキシブルな部分がある。ところが、単独の高校が小さくなっていくことになれば、校長は各高校別にいるため、教員の移動等は人事異動という手続きになってくる。「学舎制」にすることでそのようなフレキシブルな対応ができ、いわゆるデメリット部分が緩和されることを、これまで説明させていただいてきたところである。

- 子どもたちが少なくなってきたことに伴い、今回、高校の在り方について取組をされているが、アンケート等も実施いただく中で、在り方を変えていく取組については「必要なこと」、「仕方がない」と考えている方が多いということは、皆さん同じように認識されているので、今回、何もしないということではなく、こういう取組をしていくことは一定理解されているのではないかと考えている。

その中で、今回の動きについて、どうしても、子どもたちが少なくなったので現状維持をするためになんとかしようという話がされがちであるが、本来は、この機会を通じて、今よりも良い学校、魅力的な学校をつくり上げていくことをもう少し

前面に出して取組ができないかという思いを持っている。今後、様々な場で提案がされる際、京都府への要望だが、「教育の充実」について、もう少しどういう形にしていきたいかということ、説明を進めていっていただく中で提示していただければありがたいと思う。

- 先ほど「学舎制」のメリット部分を教えていただいたが、教員が移動することでデメリットも出てくるのではないかと思う。放課後に話が聞きたくても教員が他の学舎に行っていて不在であるとか、進路指導でも、教員が学舎共通で行うということによって、これまでしっかり見てもらっていた部分が疎かにならないか心配であるがどうか。
- ◆ 生徒が相談をするのはまず担任かと思う。担任は学舎にいて、生徒たちの様々な質問に対して助言をしていくということになると思う。進路指導の業務については、例えば、大学進学から就職までいろいろな業務がある。これをA学舎、B学舎一緒にして、例えば、5人の進路指導部の教員がいれば分担して仕事をするができる。要は、授業以外の業務、進路の部分についても分担ができるということになり、その分当然時間にも余裕が出てくるため、子どもたちへの様々な対応ができることになる。ところが、単独の1つの高校のままで、例えば進路指導部に3人、あるいは2人しか配置できないということになると、生徒数が減っても種類は変わらずにあるため、今まで5人で分担していた業務の種類を2人で分担しないといけなくなり、業務量が重くのしかかってくる。そうなるとう時間的な余裕がなくなり、子どもたちに対応する時間も少なくなる。あるいは、例えば、国語の教科でも、多くの学習や教材研究をしなければならなくなるため、そこでも時間が費やされる。それが生徒の学習に悪影響を与えないかということ非常に心配している。「学舎制」にすれば教員は比較的負担ができる。ただ、ご指摘のように、A学舎にいる教員にB学舎の生徒が直接質問するということは、そのタイミングでは難しいと思う。だが、教員が移動することにより、その教員が来たときには質問ができると思う。例えば、教科によっても、理科や社会であれば、それぞれの分野での専門の教員もいるし、化学・物理、日本史・世界史等、教員の得意分野での質問も学舎の移動という形になれば教員が来たときにできる。授業だけではなく、補習でも、長期休業期間中などに専門性の高い教員がまとめて進路指導の補習をすることができる。しかし、小規模校になってしまうと行いにくいことになる。そのため、「学舎制」にしてそれを緩和していきたいという説明をさせていただいた。
- 丹後に生まれて、保育所、小学校、中学校、高等学校を過ごし、卒業後、丹後に残る子どもは全体の10%もない。6、7%という数字である。一旦はほとんどの子どもが外に出て行くわけだが、日本、あるいは世界で活躍する子が出てくるような教育をしたいと思うし、その一方で、丹後に帰ってきてこの地を活性化してくれる子どもも育ていく教育を、子どもの人数が少なくなってもしていく必要があると思っている。今までしてきた教育をこれからもしっかりしていく必要があると思う。その中で、数校の小規模校があるが、そこで培ってきたノウハウをしっかりとこれからも続けていく必要があると思う。弥栄分校はその一つの代表だと思うが、新しくフレックス学園構想に基づいた学校ができて、そういうものをしっかりと持ち続けていく。一方で、ある程度大きな規模の学校も必要である。小規模校はきめ細かな指導ができると思うが、大規模校も大規模校であるが故にきめ細かな指導ができていくところもある。例えば、数学・英語では3つの学級を4つに分けて習熟度別に授業を行っているが、それを行うには、本校には4人の教員がいるが、4人だけではその時間に他学年、他クラスでのその教科の授業はできなくなる。最低4人の教員が必要だが、体制を確保するには一定の学校規模が必ず必要になってく

と思う。その中で出されてきたのが「学舎制」だと思うが、「学舎制」にもたくさんデメリットはある。先ほど指摘があったように、生徒が質問に来た時に教員がいない場合もちろん出てくると思う。ただ、例えば理科において、物理や生物、化学などは専門性の高い授業になるが、教員数が少なくなることで授業自体が設置できなくなることと比べると、教員が動くことによるデメリットもたくさんあるが、その分授業を確保できるということで「学舎制」が提示されてきたのではないかと考えている。小規模校の部分をしっかり出しながらも、大規模校も確保していく。参考資料1のP17には「丹後の府立学校における今後の教育内容」とあり、同じ普通科で分かりにくいところもあるが、教育課程をしっかりとつくっていく中で、それぞれの普通科でも違いを出しながら、それぞれの生徒が自分の興味や習熟度、進路に合わせて学校を選択できるようにする。小さな高校もできると思うし、一定規模を確保して、今申したような授業の展開ができる学校もできる、というように皆さんに理解していただけると少し分かりやすいのではないかと思います。

- 久美浜高校は丹後地域では小さな単独校として学校運営している。教員の数においても、各分掌の配置をしても限界の状態である。このまま生徒数が減ると1校の学校運営としては大変支障を来す状況になってくる。その中で、先ほども意見があったが「学舎制」の選択は、ベストではないかもしれないが、ベターな選択ではないかと思っている。

私は専門学科の教員のため、普通科の教員と違った視点から意見を述べさせていただく。今は、6次産業化ということで、何度もこの場で申し上げてきたが、本校には農業がある。それを発展させるには、これからは食の創造も必要だし、また、販売方法を工夫する必要がある。現在、案で網野と久美浜高校が学舎となっており、それを考えた時、久美浜で生産したものをどう販売していくか、という授業でのコラボができると思っている。より大きく考えると、網野と久美浜が一つのコンセプトをもって専門教育の在り方を考えるとか、また、普通科でも各校とも同じ内容ではなく、もっと特色を出す。例えば、普通科の研究活動は発展性があると思うので、「この学校は研究活動で行く。」というようなことを打ち出しながら、学校の在り方を考えることが必要だと思われる。

部活動だが、生徒数が減る中で維持するのは大変なことである。現在、準備段階であるが、網野高校とコラボして合同チームをつくって公式戦に参加しようと計画している。練習は日々一緒にはできないが、日々できることと土、日曜日に合同でできることを検討して取り組ませたいと考えている。

- 今の話に補足させていただく。私たちが教員として赴任した頃の高校は、9～10学級の規模であった。そこから段々と生徒が減ってきた。何も今に始まったことではなく、1学級減り、2学級減り、現在に至っている。今、どうするかということもあるが、これまでの経過の中で現在に至り、いよいよ様々な部分で高校が必ずしも生徒たちのニーズに機能しきれない状況が生じてきているのだと思っている。

その中で、「三つの道」として選択肢があるが、デメリットを挙げればどれも出てくると思う。考え方としては、生徒の立場に立っていかに可能性を広げてやれるか、そういう教育環境とはどういう形が良いかということではないかと思っている。第3回の懇話会の時に、教職員数の確保と部活動での融通のことに触れて、「学舎制」の方向で考え、支持したいと申しあげたが、ある部活動が久美浜高校と連携を始めている。この春の大会は3年生がいたので単独チームで出場できたが、3年生が抜けて出られず、久美浜高校と複数校チームという形になる。資料P26に「高校間における部活動の合同チーム」とあるが、合同チームには2種類あり、一つはキャンパスであったり、分校・本校の合同チームと、単独校の複数校とのチームがある。ここでは後者の話だが、今、久美浜高校と検討しているのは単独校同士の複数

校での連携である。懇話会や公聴会でも、小規模校でも実際に複数校で団体競技に出場している現状があるのではないかという意見があった。しかし、これはあくまで生徒が頑張った活動に対して、発表の場を提供してあげる、ということが主である。試合に勝つということではなく、教育的配慮ということである。よって全国大会の出場は認められていない。頑張っているのが各府県レベルで検討して試合にも出てもらったら良い、ということである。そうすると、生徒のモチベーションへの影響の問題がある。厳しい状況はあるが、可能性を拡げてやれる仕組みが「学舎制」であると思う。その形でスタートすれば正式に試合に出られることになる。

先日、岩手国体でカヌーの少年女子のカヤックフォアで見事京都府チームが優勝した。そのメンバー4名のうち、久美浜高校生が2名で、2名は綾部高校生である。両校間の距離は60～70kmある。毎日練習ができたのかといえばそうではなく、それぞれの高校において4名の選手は試合を目指して練習をしてきたと思う。そして見事優勝した。これは稀なケースかということ、実は結構事例がある。こうしなければならぬという訳ではないが、可能性が生まれる。それによって生徒が離れた地域の生徒と交流し、一生の中で大きなものを得ることも可能であるということだと思う。必ずしも、できることとすることはイコールではなくて、できるという環境を整えてやることにより、学校の状況を踏まえながらやれることは何かということ、いろいろな負担も当然あるが、検討できる枠組をつくっていくという、「学舎制」は方向として良いと私自身は考えている。

- 「学舎制」によって何か特徴が出せるかというところが、やはり保護者の方々が疑問に思われるところなのかとアンケートを見ていて感じる。平成32年度に向け、どうなっていくかについて、生徒も含めて保護者の方々は、デメリットの部分についてどうしても思われる部分が多かったり、今までこうしていたのに変わらない、こうなるのかなという部分や、例えば、平成32年度に学舎になって、本当にフレキシブルに変わっていくものか。地域を活かした部分の学科ができるのだろうかという不安な部分があるので、どうなんだろうという話になっているのかと思う。

私もデメリット部分を感じるが、マイナスをプラスに変えるのには良い機会だと感じる。プラスだと何も変わらないが、マイナスをプラスに変えるには力があるし、子どもたちも含め、「こんなことができたらいいいね」という夢を語れる時代だと思う。高校の校長も熱い思いを持たれているので、その部分をしっかり受け止め、地域に合った特色もあるので、今こそマイナスをプラスに変えていただきたいと思う。

通学面に関しても、これは府や市町村にお願いだと思うが、公共交通機関の充実であったり、通学費に10～20万円かかるという意見がアンケートにも出ているので、その軽減をどうしていくか。本当にスクールバスを暁星高校のように運行していくのかも含めて検討いただければという思いである。大学もキャンパスがいっぱいあるわけなので、高校の時、目の前にキャンパスがあって、子どもたちの交流人口もたくさん増えると、例えば、久美浜と網野高校の子で交流人口が増えることによって、もっと先の、大人になって地域を活性化してくれるのでは、と期待しつつ思っている。

- 公聴会・懇談会でいろいろな意見が出ているが、これに対する返答、解決策のようなものを示すことはあるのか。保護者なり、住民の方の不安を解消していくにあたっては、当局から「こういう解決方法がある。これについてはこの学校で前向きにやっていきたいと思う。」ということがないと、思いが平行線を辿っていくのではないかという心配がある。どのように対応されるのかお聞かせ願いたい。

◆ ご意見のとおり、「学舎制」が分かりにくいというご意見をたくさんいただいている。このように具体的にお話をさせていただくと、何となく分かってきたなど、

決してベストではないがマイナスを補っていくための一つの方法であると、ある程度ご理解いただけるような状況である。この丹後の全ての保護者の方にご理解いただく手段というのは難しいものはあるが、本日、資料として追加で「学舎制」について質問で出たことに対する答えとして作成したものをお示ししている。こうした内容を改めて住民の方、保護者の方にチラシにしてお配りしていくことや、各学校における具体の教育内容、運営の在り方というものを、今後、具体化する中でお示ししていく。そういうプロセスがあって、ご理解が深まり、方針として確立していくのではないかと思う。はじめに方針を決めつけて進めると、ご理解が深まらないままでの決定になるため、そのあたりをこれからどう進めるか。十分に検討しなければならないと認識している。

- これまでいろいろな意見が出されており、折衷案というか、地元から高校がなくなるということへのアレルギーというか、それに対応するための対策として「学舎制」というものができたのだと思うが、保護者アンケートで、「高校の在り方を考えていくのは仕方がない」が7割ほどあり、逆に在り方の選択では「本校が良い」という意見が多いという結果になっているが、これは「学舎制」がよく分からないという保護者の方が、今の高校のままで良い、とされているのかという気がする。というのは、どうしてもアンケートを見ていると、地元近くに高校がある方が良い。なぜかという、通学の時間や費用がかかるという意見が多いので、「学舎制」なら解決できるというように、アンケートなりで出されている意見を府教委として分析され、その対応などを考えていただきたい。「学舎制」にするならば、より具体的に踏み込むためには方向性を早く決めていただかないと、なかなか具体的な教育内容はできないのではないかと思う。冒頭の挨拶で、今回の在り方懇話会において、ある一定の区切りをつけたいとあったので、ここはやはりこのアンケート等の意見を十分考慮していただいて、次のステップに進んでいただくのが良いのではないかと思っている。
- ◇ 教育内容等についてもご意見をいただいているが、学校の在り方、あるいは、どのような教育を進めていけばよいかということについてご意見をお願いしたい。
- 保護者アンケートで「仕方がない」という回答が56%。いわゆる子どもの数が減るという中では仕方がないという思いを、この間多くではないが、何名かの保護者から直接お話を聞く機会などもあったので、そのことと併せて申し上げたい。
状況からすれば「仕方がない」ということと、もう一つ、そういう状況ではあるが、過疎が進んでいる丹後の地域で生まれ育った子どもたちの選択肢や可能性については、府の他地域と同じようにしっかりと残して欲しいということが、保護者の切実な意見ではないかと思う。したがって、全体の在り方の話の多くが問題をいかに軽減するかという話になっているが、それはもちろん大切なことではあるが、一方で、選択肢や可能性が府の他地域の子どもたちと全く同じ、という、こういう観点で考えると、それぞれの教育内容や置かれる学科等、併せてそこに投入される人的資源等も含め、どういう姿が見えるのか、ということによって、この「仕方がない」という意見が「それで良い」という意見になる場合があると思うので、そのように考えていくことが極めて大切ではないかと思う。
- 与謝地方の小中学校校長会においては、従来の進路指導をベースにしながら「進学指導」という言葉を駆使して意識改革を図っているところである。その根拠となるのが、小学校6年間、中学校3年間、義務教育の出口としての高等学校は全入の時代であるため、そこも含め、一人一人の児童生徒に社会的な自立をしっかりとさせ、また自己実現をしっかりと追求できる環境なり、自力で開拓できる力を育てることを

喫緊の課題であるとして、小学校教育を進めているところである。社会全体の変容、急激な変化の中で様々な要素があるが、社会の方では即戦力を求める時代に大きくシフトしてきているのではないか。様々な状況やケースもあるが、かつてのように社会が人を育てる、新人を育てて戦力にしていくという時代から、今、学校教育と社会の距離が0mというような認識をベースにして、小学校においても社会との距離は0mで、そこへ今日の前にいる子どもたちをどのように送り込んで、そして個性や自己実現に向けて今まで身に付けたことをどう発揮させるかということを中心として持っていき、と意識改革を現在進めているところである。また、困難家庭や貧困家庭を背景とする子どもたちもたくさんいる。そうした子たちの社会的自立を考えると、高等学校において多様で専門的な学びができるのか、多様な資格が取れるといったことがないと、生きる力を高めていけないだろうと思っているので、この懇話会でこれまでいろいろと議論をいただいて現在に至るわけだが、小学校の教育で仕事をしている者としては、高等学校における多様な学び、これはどうしても確保していただきたいと思っている。

- 教育内容や高校教育に期待することとは少し外れるかもしれないが、保護者対象アンケートを見せていただいて、「在り方を検討していること」を「よく知っている」という人があまりいないと感じたし、「現在の高校の在り方を変えていくこと」について「必要なこと、仕方がない」と考えておられる方が75.4%。その数字の割には三つの道の選択肢で、「本校継続」と「学舎制」を合わせた割合が49.3%ということで、資料でも分析されているように矛盾する部分もあるが、少なくとも小・中学校の保護者の方については、高校の在り方を変えていくことについては必要だと思っておられると思うし、「本校継続」と「学舎制」を合わせると半数近くの保護者の方が現在の校舎を活かすという方向で考えられていることが窺えると思う。

これから子育てをされる方、これから高校入学される子どもを持つ保護者の意見というのは尊重していかなければならないと感じる。フレックス学園構想という言葉や「学舎制」ということについて、私も十分わかるわけではないし、例えば、保護者から「どういう意味ですか。」と聞かれたときに説明できるかということがある。保護者の方も特に「学舎制」についてどんなイメージを持っておられるか、どこまで知っておられるのかということに疑問を持たれるところである。平成32年度にスタートさせると基本的な考え方のところで言われているので、それまでにどれだけ、今の小・中学校を含め、保護者の方に「学舎制」を理解いただけるかという点がポイントになるかと感じている。

- ◇ アンケートでは、普通科を希望される方が一番多かったが、一方で自由記述欄では、多様な選択ができるようにというご意見もあった。その中で希望されている学科、教育内容については、福祉や産業振興など様々なあるが、高校教育の中でこういう教育をしていけば良いのではないかということについてご意見をいただきたい。

- 参考資料1のP19「高校における各学科の特徴」に福祉に関する学科があり、他にも看護の記述がある。これまで地域の産業界の期待に応え、多様な専門教育を実施いただいていたということも理解している。その上で、今回の再編に合わせて、地元の私どもの思いということでお聞きいただければと思うが、これから社会の中でどのように子どもたちに活躍してもらうのか。そのための環境をどう整えていくのかという中で、アンケートにも多くあったが、医療、特に看護師の養成であったり、介護福祉士であれば3年で養成できるということもある。兵庫県豊岡市の日高高校には寮があることもあり、県内全域からも子どもが集まってきているという状況がある。京丹後市について言えば、機械金属の産業があり、その教育もしていた

だいているが、医療・介護現場では担い手が不足し、今後30年は高齢者の数も現状で推移し、丹後地域では75歳以上がさらに増えてくることもあるので、そうした専門教育の展開を公教育の中で検討のテーブルに上げていただくようお願いしたい。

- アンケート結果から見ても、人口が減少する中で改革をしていく必要があるということは75%以上の方がご理解いただいているということであるため、その中で、学びの質をどのように守っていくかが、本当に大切ではないかと思っている。

先ほどから説明いただいているように、「学舎制」によって先生の数も確保でき、その中でいろいろな取組ができていくと説明もいただいている。普通科を選択されているアンケート結果も出ているので、将来子どもたちが、大学進学など自分たちの選択肢を広げていくために、そうしたところに行ける学びの質を維持していただきたいと思っている。その意味では、外へ向けて成長していく、あるいは、いろいろな人材が育っていく、そのために大切なことではないかと思っている。

一方で、残された高校が地域に貢献していただけるようにということで、私どもも一緒に、また連携をしながら取組を進めさせていただきたい、と思っている。

- アンケート等を見ると、先ほどから意見にあるように、7割の方が「何とか高校を改革をしていかないといけない」という、こういう肯定的な意見が、結果として出ている。その中で、自宅に近い学校については残してほしいということも、この結果の中に顕著に表れているわけである。統合という意見も、統合しても自分の近くの学校は残して、という思いがあることを考えていくと、半数以上が地域の近いところに学校をおいてほしいというところがあり、その中で府教委でも「学舎制」を検討され、案として持たれているということについては、十分理解もできるし、反対するものではないと思っている。

ただ、人口がどんどん減少していく中で、さらに最低でも50人、60人という学校規模まで落ちていく。近い将来、何年かは数字は見えてはいないが、今、見えている数値を割り込む時代がやってくる。その時になってまた改革をしていくのか、というところで、「学舎制」に反対するものではないが、将来、また大きな改革をしていかなければならないということへの疑問が一部残る。「15年前の改革はどうだったんだ。」ということにもつながりかねないと思っている。今回の「学舎制」については、学科なり教育の充実というところをしっかりと行い、全国の模範となるものにつくり上げてほしいという気がする。

もう1点、通学に多額のお金がかかる、時間がかかるというご意見もたくさんアンケートの中にもある。伊根町は、ずっと前から通学に1時間から1時間半要し、また、経済的な負担として、私の子どもも年間30万円ぐらいの通学費がかかっていたと思う。それが今、通学についての経済負担は3分の1以下になっていると考えている。これからも高校は遠方であっても、これは致し方ないと思う。ただし、通学の交通網、そして、通学のダイヤ、アクセスについては、府教委もしっかりと同じ京都府の関係部局等と十分調整を図って、子どもたちが安心して通える経路なりコース体系を引いていただきたいということをお願いする。

- 経済的な負担についてもだが、通学時間、特に伊根町から、例えば、定時制の弥栄分校に通うとすると、可能なのかが分からない。鉄道沿線に学校が出てくることができたら、通学上も選択できるかと思うので、通学バス、スクールバスの充実をぜひお願いしたい。皆さんが公平、平等に選択できるような環境を確保すべきであり、手段の確保をよろしくお願いしたい。

- ◇ 高校の教育内容について、他にどうか。専門的な学科については将来設計がまだ決められていないので普通科を選択する生徒が多いという意見がある一方、アンケ

ート等では様々な専門的な教育も必要ではないかというご意見もある。

- 丹後通学圏には専門的な学びの場が、多様な分野で用意をされており、それぞれの特性を生かして地域活性化に貢献をしてきたと思っている。

どこの専門的な学びにおいても、共通点はスペシャリストの育成だと思っている。3年間積み上げる専門的な学びは、府北部の発展にも十分な技能、力量に達しているのではないかと感じている。各校によって扱う内容は異なるが、いずれにしても、基本から入り、細かく組み立てられるカリキュラムに従って学年進行とともに、質、レベルを向上させて、社会で要求されている基準まで育てあげて社会に送り出せていると思っている。専門学科で学ぶ生徒は、自分たちは何を期待されているのかをよく理解をしており、その使命感のもと目標に向け目を輝かせながら歩み、在学中に驚くほど大きく成長を遂げている。私は、専門高校の生徒は、3年間でここまでよく伸びるなど感心しているが、その要因は何点かある。1つは、先ほど意見にもあった「資格」である。資格は、授業で学んだ技能を更に高める機会として、在学中に計画的に取得させており、本校でも3年間で、多い生徒で20以上取得して卒業している。資格は競争ではなく基準点で合否が決まるので、自分が頑張ればそのまま成果が出て来るため、専門学科の生徒は頑張れる。2つには研究活動である。どの分野でも未解決の領域がある。誰もやっていない研究テーマを生徒には掲げさせ、当然、失敗や挫折はするが、様々な角度から分析して解決できる力をつけさせようと思っている。誰もやっていないので、専門的な学びをしている生徒は、常に「日本初」に思う存分に打ち込める環境があり、それも大きな力となって伸びるのかと思っている。3つには、地元の方々のバックアップである。地元の関係機関と連携して深い知識・技能を指導いただいております、本当に専門性を高めていっている。教科書を越えているレベルをご指導いただいているが、知的探究心を刺激され、学ぶ喜びを肌で感じ取っている。このように、地域から応援、期待してもらっているという感覚が自信につながり、研究を追い求めるたくましさを育てている。だからこそ専門的な学びをしている生徒は伸びるのだと思っている。本校の事例しかお示しできないが、阿蘇海のアマモ場の造成には何年も取り組み、やっと光明が見えてきた。プロでも難しいとされている手長エビの養殖に高校生が成功を収めた。未利用資源を使ったブイヤベースラーメンの開発をして、北部の特産品化に向けて子どもたちが取り組んでいる。この高校生の力を大きく伸ばす専門の学びの環境において、この丹後は素晴らしいと思っている。この北部再編に関わって、専門的な学びの場をさらに充実させ、地域を支える若い力を育てて北部活性化に今後も貢献していきたいと思っている。

「三つの道」を専門的な学びの観点から見た時に、統廃合では専門的な学びがおそらく縮小する部分も出てくると思って心配しているところである。また、今回の北部再編は数合わせではなく、教育の質を高める機会にしなければならないと思っている。この教育の質に焦点をあてた場合に、本校の継続よりも、異なる専門分野が融合して新しい研究領域が創出される「学舎制」が生徒の学びの好奇心を刺激して北部活性化にさらに力になっていけるのではないかと専門的な学びの観点からは思っている。

- 機械関係の組合に勤務している者の観点からすると、峰山高校に産業工学科があるということで、随分とたくさんの先輩が今の地場産業と言われている機械金属業に貢献していただいているし、そこから巣立った方が京阪神、また全国でも活躍をされていると聞いている。そこで、我々が求めるのは、基本的には高校教育であるので、社会に出て、すぐに実践に役立つかということ、これは現在のマシンや新しい産業構造の中ではなかなか難しいと思っている。あくまでも高校教育では基礎を徹底してほしい。加えて、高校生でも取れる資格はあると思うので、国や京都府の縛

りがあるかもしれないが、少しでも高校生が取得できるようにしていただくと、それが即社会に出て役に立つことになるだろうと思うし、あくまでもその専門教育であるため、高校教員だけでは、正直申し上げて指導は難しい面は多々あるかと思う。我々の業界にも指導的な立場でOB、現役含めてたくさんおられるので、それをどう活用していくか。また、織物・機械金属センターという府の最先端の機械が揃った設備もあるので、そことの融合をどういう格好で進めていけるか、より有効な、子どもたちが目を輝かせて専門教育に励めるような体制をぜひ整えていただきたいと思う。

- 私は農業高校卒業ではなく、普通科を卒業して農業分野に入った。以前から懇話会でも言っていたが、丹後で農業科が充実しているかといえば、残念ながらできていない。ただ、入口はあり、可能性はあると思う。そこから綾部の農業大学校に行ったり、大学に行ったりというきっかけにはなっていると思うので、いろいろなきっかけを作っていただければと思う。先ほど言われた6次産業化や海産物を使った加工品の在り方、また、今はロボットが農業分野では作業をするなどICT化で農業を変えていく技術もどんどん進んでいる中で、多彩な考え方を求める時代が来ているのかなと思う。その入口をつかむことができているのかと思うので、ぜひそのようなきっかけを作っていただきたいし、農業の分野でも全国から若者たちが国営で農業をしている。やはり、そういう機会を作ることによって、丹後でやれるんだという話も含め、与謝の方々はなかなか来ることができない高校かとは思いますが、あそこに行けばいろいろなことが学べるぞという形にしていただければ魅力もあるし、私たち地域が高校を含め、関係機関であるJAも含め、もっと応援していかないと農業の将来には向かっていけないと思っているので、今後、私たちも努力していきたいと思っている。
- 私は今、介護福祉関係の仕事をしているが、京都市内のある大きなお寺が経営している特別養護老人ホームなども今人材が足りないということで、九州の高校と提携して授業料を3年間負担する代わりに京都に来ていただいて介護施設で3年間働いてもらい、その間にしっかり学んで国家資格をとってもらおうという形態をとっているところがある。人材が欲しい、という中でそうせざるをえない状況である。やはりスペシャリストというか、国家資格は自分のもので一生役立つので、そうした資格を目指していける学科をつくるべきと思うし、そうした形での高校生を募集してほしいと思っている。参考1のP14、15の中で、京都八幡高校においては、南キャンパスで介護福祉と人間科学といった、保護者からみても生徒からみてもはっきりと学科が明確化されている。また、岡山県や山口県も同様である。私は、今後こうした形になっていくということは間違いないと思っている。私は普通科を安易な中で選んでそのまま社会人になったのだが、スペシャリストを目指すのであれば、こうした専門学科に特化した形が出てくるのではないかという思いがしている。
当時、仲のよかった同級生2人は、当時の中学の先生に「きみは普通科には受からないから商業科へ行け」と言われた。その2人が商業科に行き、簿記を一生懸命勉強して、高校を卒業して40年経つ中、一人は近畿税理士会のスペシャリストになっているし、もう一人も某地方銀行に勤めて今は執行役員にまでなっている。しっかりとその学科で学ぶことでそうした結果も出てくる。介護の仕事においても、若い子たちに「資格をとって自分で施設を運営しなさい。」と常々言っているが、岡山県や山口県のような専門的な学舎となるよう、今後の検討の中で、理解を求めながらそうした高校教育を進めてもらいたいと思っている。
- 私立学校として、高校教育の一端を担わせていただいている立場だが、教育者として、単に私学の経営からではなく、教育に関わっている人間の観点で意見を述べ

たいと思う。三つの道で、小規模校は、今後この地域を支える人材を育成する教育という観点では、厳しいものがあると思う。普通科教育という点でいくと、私の個人的見解では、この地域が今後、人口減により産業など色々な形が変化していく中で、そこを支える人材育成は最も重要なことのため、やはり生徒の立場で考えたら、自分の高校の同じ学年に本当に切磋琢磨できる人間がいて、勉強や部活動を頑張れるよう、一定の生徒数が必要という考えを持っており、普通科教育であれば統廃合がよりベターなのだろうと思う。しかし、他の専門学科等を見ればまたそれは変わってくる。京都府はもうほぼ方針を決めておられるが、今後、どの道にせよデメリットはあると思うので、そのデメリットを埋めていただけるような取組をぜひ北部の振興のためにお世話になれば嬉しいと思う。

もう一つ、資料P21の統廃合と「学舎制」導入の三つの道のところで、統廃合では通学の負担が大きくなる。「学舎制」になると今度は学舎間の移動にかかる負担に変わると思う。この時間的な負担は、この部分では生徒という点のみだが、実際に教育に携わっておられ高校の教員の負担ということが現場的にはすごく大事ななという思いもする。教員はやはり教えることに多くの時間を費やすべきであるため、「学舎制」になると、どうしても生徒の負担以上に教員の準備、移動など様々な時間的負担が生じると思うので、その辺りが教育の低下につながるようには何とか配慮いただければありがたいという感想を持っている。

- 普通科希望についてだが、現在、今年の中3生の進路希望状況は、9月段階では全体の7割くらいの生徒が普通科へ進学したいという意思表示をしている。保護者の中にも普通科を設置してほしいという希望があるようだし、できれば「学舎制」においても普通科を設置いただけるのが良いかなと考えている。

私は京丹後市久美浜町在住だが、地域にある久美浜高等学校は総合学科である。私の地域は地理的には峰山高校に近い実態があり、普通科の場合、網野高校ではなく峰山高校の普通科を希望している子どもが非常に多く、実質的に普通科では峰山高校に進んでいる状況があると思う。今は200円バスがあるので、それに乗る生徒もたくさんいるし、「できれば近くの高等学校の普通科に行かせたい。」というのが、保護者の希望でもあると思うので、専門学科を設置してスペシャリストを育成するという考え方もあるが、反面、普通科を残していただけるとありがたいと、中学校現場としては考えている。

- 三つの道をどうするかだが、「学舎制」の方向で進もうという府教委の考え方がある。これについては、まず、アンケート結果を見ると、子ども、あるいは保護者は普通科志望が一番多いが、後は総合、農業、商業、工業、水産、家政科、介護だとか、そういった近々の課題に対応できる、要するに実学をどういう形で学習内容に取り入れていくかということに尽きるのかなと思っている。「学舎制」でいくという想定をしながら、その中で、実学として、どういう形のものを府の子どもに提供できるのか。そして、そのことが地元に残る、あるいは外へ大きくはばたいたとき、「京都で学んでよかった。こんな力がついた。」となれば良いと思う。

公聴会でのアンケートでは、高校教育に求めるものとして、進路実績や校風、あるいは学習指導ということがあがっている。この中で見ると、校風はやはり大切にしていきたい、歴史と伝統、先人がずっと培ってきた、残した財産・遺産のようなものをそのまま受け継ぐことが大切だと思う。この校風というのは、子どもにとっては「この学校に行ってよかった。」、保護者にとっては「この学校だったら安心して学べる。いじめもない。不登校もない。学習に集中できる。活動に集中できる。」という思いになるのかと思った。

それから資格をとることについては、そのとおり大切なことで、実学ということ先ほど述べたが、これが学習内容にどの程度反映できるか、これは府教委、首長

部局の方で予算をどの程度積極的にとっていくかということによると思う。その時に進路実績、そして高校を出た子どもたちがどう社会で羽ばたいているか、そうしたことも追跡調査をしていただきながら、予算獲得をしっかりとさせていただいて、教員の質、あるいは人数を揃えていただくことをお願いしたいと思うところである。

- 皆さんのご意見を聞いていて、私自身やはり教育の質を落としてはならないという思いがあるので、今まで懇話会等で意見を述べさせてもらっていたように、地元
の学校を無くすことは、地域の活性化から考えても、寂しいところがあるため、ぜひ「学舎制」の充実を求めていきたいと考えているところである。また、小さい頃から進路希望を持っている子どもは良いが、多くの子どもがまだこれから高等学校へ行って、どうしていくのかを考えていくのだろうと考えており、資料P21にある「生徒の個性や能力を最大限に伸ばす教育」、これは小・中学校もそうだが、ぜひ、どうすればこの教育を進めていけるのかを追求していただき、デメリット部分は、先進県等の事例を京都府も導入していただき、不安を払拭できるよう財源を求め
ていきたいと思っている。

もう一つ、私がずっと思っていることは、与謝野町においても、この在り方検討の動きによって、ピンチがチャンスになったというか、加悦谷高校の在り方をなんとかしなければという機運が高まってきている。平成32年度を待たずして、各高校の特色をどう創っていくのか。今からでもしなければならぬことだろうと思
っているので、各校が、自校は何をしていくか、何を特色として出していくのかという
ことを、今もされているが、さらに出していくことが必要だと常々思っている
ので、ぜひそうしたことをお願いしたいと思っている。府民の方になかなかわかりづら
いという点については、何らかの形で方向性を示し、早く理解を求めていただく方策
をお願いしたいと思っている。

- 丹後広域振興局では地域振興のさまざまな取組をしているが、「海の京都」を前
面に出して、北部7市町で地域の魅力を発信して北部地域の交流人口を拡大して
いくことを進めている。昨年は京都縦貫自動車道が開通し、今年ももう少しで京丹後
市まで高速道路が延びるので、交流人口が増加し、多くの人がこの地域に来て
いただける環境が整いつつある。この機会に、地域の魅力をよりブラッシュアップ
して発信して、地域経済の活性化、また、移住・定住につながれば良いと思う。
そうした中で、府立高校、地域の子どもたちにも、この地域にはもっともって
素晴らしい魅力があることを知ってもらおうと、TANGO魅力伝え隊をはじめとした取組も
していただいている。高校生も、地域資源を使った取組や、地域と連携した取組を
各高校で進めていただいている。教育機関と行政や、民間の機関など地域とも
連携した取組を進めていくことで、それぞれの高校がより特色を出して、さら
に発信することで、外からもこの地域の高校に来ていただけるような状況にな
ればよいと思うし、行政もしっかり取り組んでいきたい。

- まだ決定はしていないと思うが、本日の懇話会を受けて、府教委としては今後ど
ういった予定を立てているのか、わかる範囲でお願いしたい。

- ◆ 先ほども少し申し上げたが、保護者、府民、与謝・丹後地域にお住まいの方々に
向けて、「学舎制」についてご理解を深めていただける資料を作り、また府教委の
ホームページなども充実させて、この間の懇談会等でのご意見も掲載しながら、
それに対するお答えとして資料をつくってお配りしたりネットに掲載したりとい
うことがまず必要と思う。その上で、高校の具体的な教育内容や運営の仕方、部
活動や授業の進め方、こうしたものについては、各学校で検討を深めないこと
には具体化が進まない。府教育委員会だけではなく各高等学校と詰めていく
プロセスがどうして

も必要になってくる。

また、全て仕上げの段階までもっていくとなると、かなりの時間を要するため、こうした形で固めていくということを何らかの形で表明する場面が出てくるべきかとも思う。ただそのあたりは、本日のご意見を踏まえて、方針としてしっかりさせていきたいと考えており、今は少しぼやけているが、そのような考えをもっているということでご理解いただきたいと思う。

- ◇ 今後、アンケートの結果については、いただいたご意見も含めてホームページに掲載するなど、広く周知したいと考えている。保護者の皆様からいただいたご意見に対するお返しについても、方法を検討しながら進めていきたい。

[閉会あいさつ]

- ◆ 本日はありがとうございました。それぞれの立場からさまざまな視点・観点で大変貴重なご意見をいただいた。いずれも検討を進めるうえで欠かすことのできないものと受け止めている。

本日は「学舎制」についての、さらに疑問についてご質問もあったし、教育内容についても、普通科、専門学科の在り方など大変深いご意見をたくさんいただいた。これから各高校での検討を深めていく上で、貴重なご意見と考えている。

今回でこの懇話会については一つの区切り、と冒頭に申し上げたが、検討を進めていく中で、ご意見をお伺いしたい場面も出てくるかもしれないが、その際は、改めてお力をお貸しいただきたい。

今後とも引き続き、本府の教育行政、高校教育の充実に向け、ご理解とご協力を賜りたい。